



【講演】

# 多様な日本語力の学部留学生 の受け入れと大学での学び —展望と課題—

立教大学国際化推進機構長  
異文化コミュニケーション学部  
異文化コミュニケーション学科教授  
池田 伸子 氏

○**小林** それではこれより始めさせていただきます。池田先生のご講演です。タイトルは、「多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学び—展望と課題—」です。よろしくお願いいたします。

○**池田** 本日の私の役割は、第1部でご登壇くださいました各学部の取り組み、さまざまな、すごく素晴らしい取り組みがあったと思うんですけども、それを大学として今後どうつなげていくのか、また、大学として目指しているところにたどり着くために、どんな課題があるのかということと共有して、今後さらに立教大学の国際化をいい方向に、正しい方向に進めていきたいというところを締めるということだと思っていますので、少し、重要ではないところは巻きながら進められればというふうに思います。

ですので、私としては、「多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学び」という、本日のシンポジウムのタイトル、それを大学としてどう展望し、また、その実現に向けてどういう課題を認識しているのかということをお話させていただきます。【スライド⑥-1】

まず、いつも私のプレゼンはぶっちゃんけはっちゃんけなんですけれども、本日は少し、ちょっとスタイルを変えまして、立教大学の建学の精神から入りたいと思います。少し高尚な感じで、「PRO DEO ET PATRIA」という、「神と国のために」というのが立教大学の建学の精神です。立教大学の構成員は誰でも知っていますし、学生も知っていることと思います。

その意味ですけれども、普遍的な真理を探求し、私達の世界、社会、隣人のた

めに、一人一人の個性を重視した人間教育、これを立教大学は、およそ150年前の見学のときから、建学の精神として大切に育てながら教育を行っています。ここを見ていただいてもわかるように、世界、社会、隣人のために、それから一人一人の個性を重視した人間教育、これはまさに今、立教大学が、あるいは日本が目指そうとしている姿そのものだというふうに私は理解をしています。

そして今、この21世紀、立教大学はその建学の精神を持ち続けながら、「Rikkyo Global 24」、つまり立教が2024年を目指して、どういうふうにグローバルな国際化した大学になっていくのかというものや、TGU、これはいわゆる文部科学省からお金をもらった補助金ですけれども、その約束をきちんと果たしていくということ。そしてもう一つ、RLSと書いてあるのはRIKKYO Learning Styleの略になります。この立教大学の建学の精神、そしてこれからの21世紀の教育、そういうものを考えたときに、学士課程教育、大学の4年間の教育というのはどういう姿であるべきなのかということを全学で共有して、そのRLS、RIKKYO Learning Styleというところも実現を目指しながら、今現在、立教大学はここにあるというところでございます。

そのRikkyo Global 24、あるいはRIKKYO Learning Styleで、立教大学が今、どんな人材を育成しようとしているのかというところは、これはもうホームページにも書いてございますけれども、新たなグローバルリーダー、それを育成するということを全学として取り組んでいます。

その新たなグローバルリーダーというのはじゃあ何かというと、いわゆる西欧、欧米系の、ビジネスでしかもお金をもうけていきましょうというようなグローバルリーダーではなく、ここにあるように、国境を越えて流動化する社会に柔軟に対応し、新しい仕組みを生み出していく変革力、それから、豊かなコミュニケーション力で異なる文化・習慣を持つ人々とともに課題を解決する共感協働力、そして地球規模の困難な課題に向き合い、問題の本質を理論的に解明する思考力、こういうものを備えている人を新たなグローバルリーダーというふうに立教大学は定義をし、その育成に向けて全学で取り組んでいきたいと思います。【スライド⑥-2】

そこで、今日のテーマ、「多様な日本語力の学部留学生」というところに結びついてくることとなります。立教大学が多様な日本語力の正規学部留学生を受け入れたい、受け入れを増やしたいというのは、単にTGUの数値目標を達成した

いということではありません。立教大学が建学からずっと持ち続けている、立教大学として、21世紀に必要とされる人材を育成していくという目的、そこに欠かせない存在として、多様な日本語力の学部留学生が必要だというふうに考えたからだということです。

では、なぜ多様な日本語力の学部留学生なのか。ここは前回の、去年のシンポジウムでも同じものを示させていただいています。ここについて詳しく述べることはいたしません、私たちが育てている学生、つまり立教大学の学生が、大学を巣立ち、これから社会の中で生きていく、その社会は、私たち、つまりは40、50、60になるうとしている私たちが生きてきた社会とは、見える景色が変わっているということです。

つまり、これまでの日本人だったら、ほぼ日本人の環境の中で、大体日本人と同じような考え方を持った人とつき合いながら生きていくということができた。でもこれから社会の中で生きていく学生たちは、つまり立教大学を巣立っていく学生たちは、そうじゃない社会で生きていくということになる。それをきちんと見据えて、大学は教育を行わなければいけないということです。それは大学よりも社会のほうが敏感です。ですから大学には、今いろいろなところから圧がかけられています。その一つが文部科学省からのグローバル化しなさいというような圧であり、一方で大学を卒業した学生が巣立って入っていく社会、主にビジネス界からの圧というのも大学にかけられています。

そこで、大学で育成すべき人材像についてもさまざまなところがさまざまな意見を出していて、代表的なものでも、社会人スキル、21世紀型スキルなどがあります。ここに共通しているのは、ハード、つまりこれまで大学人が、大学で教えればいいと思ってきたもの、それがハードスキルです。つまりは専門的な知識であったりとか、専門的な技術であったりとか、そういうものだけではなくて、ソフトスキルを育ててくださいというような圧がかかっているということになります。

ソフトスキルというのは、平たく言えばコミュニケーション力であったり、自分と異なる人たちの存在を認識する力であったり、先ほど、立教大学が今育てようとしている思考力であったり、変革力であったり、そういうさまざまな目に見えない、だけれども他者と接するときに必ず必要になってくるもの、それがソフトスキルです。それを今の大学は育てなさいというふうに圧をかけられている。

ということは、大学がこれまでのように、それぞれの専門学部の中で、専門的な知識、それだけ教えていけばよいという時代ではなくなったというふうに私は考えています。

そんなときに、4年間、共に学び、授業、それから授業外で、本日の第1部のところで示してくださったようなさまざまな交流を生み出してくれる、多様な正規学部留学生の存在というのは、立教大学にとって、つまり留学生にとってとか、日本人学生にとってというのではなくて、立教大学が育てなければいけない人材を育てるためには、その立教大学を構成してもらうメンバーとして絶対必要なんだというところに立っているからです。

なぜならば、本日の第1部で先生方が発表してくださったように、彼らがいることで、チームビルディング、それから批判的論理的思考、それから個々の学生が自分の特性、それに気づきながら自分の役割をちゃんと認識していくようになる。さらに地球市民教育、他者との協働、文化的差異の認識と受容、こういうものが、彼らがそこにメンバーとしていて、どれだけ自然に生み出されていくかということです。それを大学として大事だというふうに共有し、新たな正規学部留学生を受け入れようという動きに今なっています。**【スライド⑥-3】**

ここは去年の繰り返しです。そこで立教大学は、ではどうやって新たな学部正規留学生を受け入れていこうかということで、今の外国人入試つまり、つまり巖先生、経済学部の先生がおっしゃったように、高い日本語力が前提となるような入試、これはこれで続けるけれども、それ以外の新たなアドミッション、つまり日本語力にはもうよらない、そういう形のアドミッションを大学として実施をしていくのだということまで、去年のこのシンポジウムで共有をしています。

でも、これを全学的に進めていくためにはさまざまな改革が必要です。「改革」という文字が赤くなって、ちょっと大きくなっているところにご注目ください。これは私の力が入っているということではなくて、難しいというふうに感じているからです。でも、何というんでしょう、仕組みという言葉ではちょっと収まり切らない。やっぱり改革、改革が大学の中に求められているんだということです。その一部ですけれども、ちゃんと新しい形の留学生を受け入れていくためには、大学として、入学後の集中日本語教育、これは絶対に充実したものをつくらなければいけないし、同時に英語展開科目の充実、これも必須です。日本語でやってねというような姿勢というのは、国際化していこうと決めた大学であれば、もは

や許されないと思っています。

英語で全て卒業させていくということが是ではありません。100%正しいということではありませんが、日本語で展開する授業はやはり多いけれども、英語だけでも卒業できるよという段階を保障する、そのぐらいのことはやはりしなければいけないというふうに思っています。

さらには、異文化コミュニケーション学部の話にもありましたけれども、入れて、育てて、きちんと社会に送り出す、そこまでが大学の役割だと思っていますので、本学ならではのきめ細かいキャリア教育、これも外せないと思っています。

#### 【スライド⑥-4】

でも、そんなさまざまな取り組み、いろいろ仕掛けは必要ですが、一番大切なのは、日本人学生と留学生が協働する仕組みをつくることです。どんな素晴らしい器や、どんな素晴らしいプログラムを作っても、そこで協働が生まれなければ、何もシナジーは生まれません。まず日本人学生と留学生が協働する仕組みをきちんと、全ての部分において、全てのパーツにおいてつくっていくこと、それから学び、気づきを実感できる仕組み。これは経営学部のお話にもありましたけれども、仕組みはつくっても学生がちゃんとそれを認識しているのか、その効果を認識しているのか、気づきを認識しているのかということはとても重要なことで、それを実感できる仕組み、これをつくるということが一番の肝になってきます。だけれども、難しいんです。これが。

だから、お金があればさまざまな仕組みができます。立教大学、お金もありませんので、仕組みをつくること自体も難しいんですけども、さらにその仕組みの上に重要なことをきちんとはめ込んでいかなければいけない。そこが一番大変大切だし、大変だと思っています。

今、立教大学が考えているのは、学生の豊かな学び、これをまず第一に考えています。立教大学の都合、立教大学の評判、そういうのはもちろん重要ですが、大学として一番考えなければいけないのは、立教大学の学生の学び、それを豊かなものにするのだと思っています。そうしていくことで、自然と大学全体が持続的に成長していけると考えています。

これまで、多様な日本語力の留学生受け入れということになると、例えば英語のプログラムが必要なんだったら、ちょっとアイランド的に、ぼちっと英語のプログラムくっつけてみましょうとか、あるいは、今ある日本語の科目は、その

ままとりあえず置いて、プラスでお金あげるの、そこに英語で展開する科目をちょっとつけ足してくださいとか、あるいは日本語力が弱い学生が入ってくるんだったら、とりあえず日本語の科目増やしてください、そういうような形の対応というのが誰でもすぐに思い浮かぶし、そういうふうにして国際化を進めているところも、もしかしたらあると思いますが、立教大学が今やらなければいけないことは、これは全て忘れるということです。抜け出すと言ってもいいかもしれません。

先ほども言ったように、留学生と日本人学生が自然に協働し、それからそれを学び、その大切さに気づくような仕掛けをどうやってつくっていくかということを考えてときに、必要なのは、出島の、アイランド的な英語のコースではなくて、各学部が組み込まれた英語のコースです。各学部が自分たちの学部の学生として、その学生を育てていく、そういう認識を持てるようなコース、それがなければ留学生と日本人学生の本当に有機的な協働というのは非常に生み出すのが難しくなってきます。

さらに、今ある日本語の科目はそのまま置いて、プラスで英語の科目をつけ足しましょうというんじゃなくて、こういうことを進めていくということは、教員の意識改革でもあるので、今ある日本語の科目を、どう教育言語を切り替えていくのか。隔年開講でももちろん構わないと思いますが、プラスに余計なものとして、余計なものというのはちょっと言葉がよくないですが、つけ足しとして英語の専門科目を考えていくのではなくて、ちゃんと自分たちの学部学科のカリキュラムの一部として、英語の科目を組み込んでいくということが絶対に必要です。

さらに学部と連携した英語教育。今は日本語教育が話題になっていますが、学部の中に、大学の中に、英語の専門科目をきちんと有機的に組み込んでいくことは、それを履修する日本人学生に対する英語の底上げも当然必要になってきます。そのときに、先ほども言ったように、じゃあ一般教養の英語の科目数を増やせばいいでしょうっていうのではなくて、英語教育のカリキュラムも、学部との密接な連携が欠かせなくなってくるということです。つまり大学の英語教育は、単に英語の能力をアップするということではなくて、それぞれの学部で展開されている、英語で教えられている専門科目にきちんと結びつけていくようなプログラムが必要になってきます。そうすると英語教育でも、各学部との連携、密

な連携のもとに、さまざまな科目が設計されていく必要があります。

それと同じように、学部と密接に連携した日本語教育、これも外せません。さつき丸山先生からお話もありましたけれども、一番大切なのは、入ってきた正規留学生が立教大学、あるいは自分の所属学部に着いていくことです。そのためにはその学部の先生方が、正規のこの留学生を入れてよかったというふうにも思ってもらいたいことはとても重要なことです。留学生を入れたら面倒くさいとか、留学生を入れたらちょっと余計に手間がかかると思われてしまうのは、私としてはものすごく心外ですが、そう思ってしまうのを、日本語の集中の中で、各学部が必要とされるような基礎的な力であるとかそういったものをつけさせていくということが必須になってきます。そうすると学部と連携した日本語教育は非常に重要になっていますし、ぜひともお願いしたいと思っています。

また、立教大学の建学の精神のように、一人一人の個性を生かした協働の仕組み、これをいろんなところにちりばめていく。そのためには、やっぱり一番上に書いてある、学部・学科が自分ごととして取り組んでいくことが外せない。これができる、今日のパート1で、4つの学部の先生方がお話しして下さったように、学生のアイデンティティー、つまり立教大学に入ってよかった、観光学部に入ってよかった、もっとこういうことがしてみたい、モチベーション、それからもっと留学生と触れ合いたい、それから留学に行ってみたい、今までちょっと行きたくなかったけど行ってみたい。世界や異文化に対する高い意識、そしていろいろな人と積極的にコミュニケーションをとっていきたいというような、21世紀に必要なさまざまなソフトスキルというのが、日本人学生、留学生という区別はなしに、そういうプログラムに参加した学生がみんな身につけていく、そういう立教大学が実現できると思っています。【スライド⑥-5】

つまり立教大学が今、ことし2019年、もすぐ終わって2020年ですけれども、目指すべきは、これまで立教大学は、学生の流動性、つまりどうやって学生を送り出そうとか、どうやって留学生の数を増やそうか、つまり立教大学に来てもらおうかというような流動性に着目した政策が多かったように思いますが、これから立教大学が目指すべきは、その先の、さらに一段進んだ国際化のフェーズだと思っています。

そこではカリキュラム、それから教育内容、それから教務、学生支援体制、つまり大学としての全体的な真の国際化というのが絶対に外せなくなってきます。

ここにもありますように、カリキュラム、教育内容、これは学部の責任です。つまり各学部が自分ごととして、真の国際化とは何なのか。そうすることで自分の学部の学生がどう豊かに育つのかということを真剣に自分ごととして考えていく。それだけではなくて、教務、それから学生支援体制、これは大学の構成メンバー、つまり職員の方たちもこういう正規留学生を入れていくことで、立教大学が持続的に成長し続ける大学でいられるんだという理念を共有し、そこで自らが真の国際化に対して向き合っていく、そういうフェーズに入らなければいけないと思っています。

そのためには何が必要かということは、まずは重要性、必要性、危機感の共有、これが外せないと思っています。なぜならば、ここにも中国の先生方、韓国の先生方、いらっしゃいますけれども、中国、韓国、いわゆる東アジアの日本、中国、韓国というその三国の中で、今日本が一番遅れています。中国や韓国はもっと先のフェーズに大学はあります。例えば韓国なんかでは、有名な大学はもう30%以上、科目が英語で展開されていますし、大学によっては、英語で展開されている科目を何単位取らないと卒業させないよというような大学も少なくありません。つまり外国語で、英語で展開されている科目を、大学生として必修に履修させているところもある。

さらにベトナムやマレーシア、ここも、ある意味では日本よりも進んでいます。なぜならば、海外の大学を誘致する、あるいは海外の教員を連れてくるというやり方ではありますが、大学での教育言語を英語に切り替えています。つまり有名な大学なんかでは、英語で教育を行いましょうという動きが国を挙げて進んでいます。さらにはシンガポール、香港、フィリピン、本日学生も来て来ていますけれども、そこはもともと教育言語、高等教育の言語が英語です。

つまり、アジアという地域を見たとしても、高等教育での教育言語の中で、英語という言語を避けて通ることはできなくなっています。さらに加えて、英語で専門科目が展開されているということを前提とした大学間のネットワークづくりというのがどんどん盛んになってきています。つまり、お宅の大学とつき合いたいけど、英語でやっていないんだったらちょっと難しいわねというのが今の、現在の、大学間のネットワーク構築です。だからそういう危機感、そこから外れてしまったら、もう本当に世界のさまざまな国の大学と連携をしながら発展していくということが非常に難しくなってきます。そういう危機感を、やっぱり認識し

ていくことが絶対に必要だと思っています。

また、効果の見える化、これは絶対に必要です。さっき言った学生の流動性部分、例えば何人外に出て行って、何人大学に入ってきているか、あるいは英語で展開されている科目が幾つあるのか、コースが幾つあるのかというようなところは見えるんです。数としてあらわれてくるので、どのぐらい進んでいるかという進み具合だったり効果だったりというのが見えるんですけど、学生同士の協働によって、学生がどんな豊かな学びを経験したのか、またそれによってどう成長したのかというのは、ものすごく見えにくい。数であらわしにくいと言ったほうがいいかもしれません。

けれども、その見えにくい、あらわしにくいのが、その学生の成長や評価を見える化する仕組み、これを大学として構築していく必要があると思っています。そうすることで、上の重要性、それを全学の構成メンバーと共有をしていくことにも寄与していきますし、参加した学生自身はその成長を実感できるところにもつながっていくと思います。

さらに自発的な取り組みの促進です。ここが結構一番難しく、大学がやれと言うならやるとか、ちょっとこれ、今やらないとまずいよねみたいな形でスタートしても、さっきも言いましたように、これ教育なので、学生を豊かに学ばせて社会に送り出すということには資さないと考えています。つまり、やらなければいけないからとりあえずやるというような形では、なかなか熱を持った教育というのがそこに展開されないと思っています。

なので、大学の構成員がやりたいとか、やりたいまで行かなくてもやってみたい、やってみようというような形で自分ごととして、国際化ということ、あるいは多様な日本語力の学生の受け入れということを考えてもらう。そこが非常に大事だと思っていますが、この三つが今現在、立教大学が抱えている課題でもあると思っています。

上から強制的に、例えば1つの学部、1本ずつ英語のコースをつくりなさいということができないというのが、立教大学の良さでもあります。つまり、みんなで話し合っただけを進めていくというのが立教大学の良さでもあります。先ほども言ったような、アジアで起きている高等教育のかなりスピード感を持った変化、そこに取り残されないためには、やっぱり全学がもう少しスピーディーに物事を変えていくということが必要だと思っています。

だけれどもさっきも言ったように、トップダウンで物事が進まないというのが立教大学の良さなので、ここは粘り強く全学の共有というのを広げていかなければいけないと思っています。

この三つの課題というのがあるということ、大学としては十分に認識しながら、でも、やはり学生の豊かな学びというものを目指して、多様な日本語力の留学生の受け入れを進めてまいりたいと思いますので、日本語教育センターの先生方にはぜひともよろしく願いますということで私からは終えたいと思います。ありがとうございました。(拍手)【スライド⑥-6, 7】

○小林 池田先生ありがとうございました。この後第2部に入ります。

【スライド⑥-1】

その展望と課題

多様な日本語力の学部留学生の受け入れと  
大学での学び



立教大学  
国際化推進機構長  
池田 伸子

【スライド⑥-2】

立教大学！

PRO DEO ET PATRIA（神と国のために）

普遍的な真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために  
一人ひとりの個性を重視した人間教育

多様な日本語力の学部留学生

Rikkyo Global 24, TGU, RLS



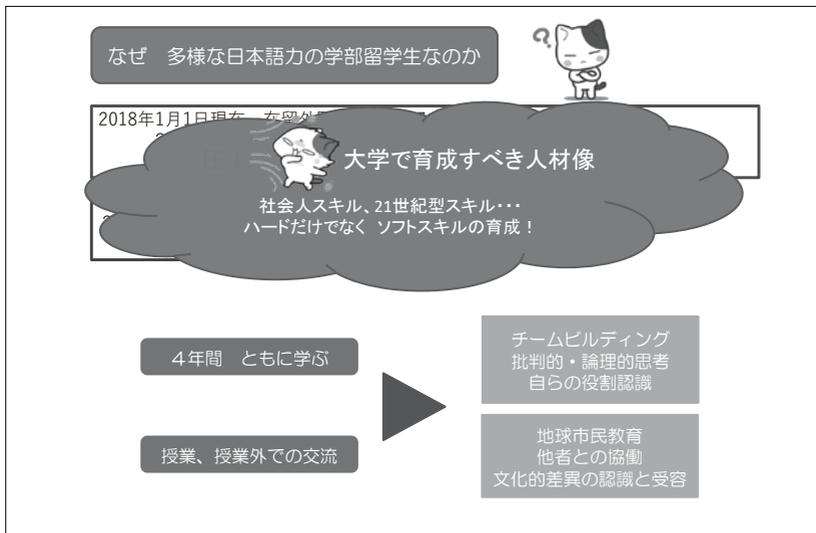
新たなグローバル・リーダーの育成

国境を越えて流動化する社会に柔軟に対応し、新しい仕組みを生み出していく変革力

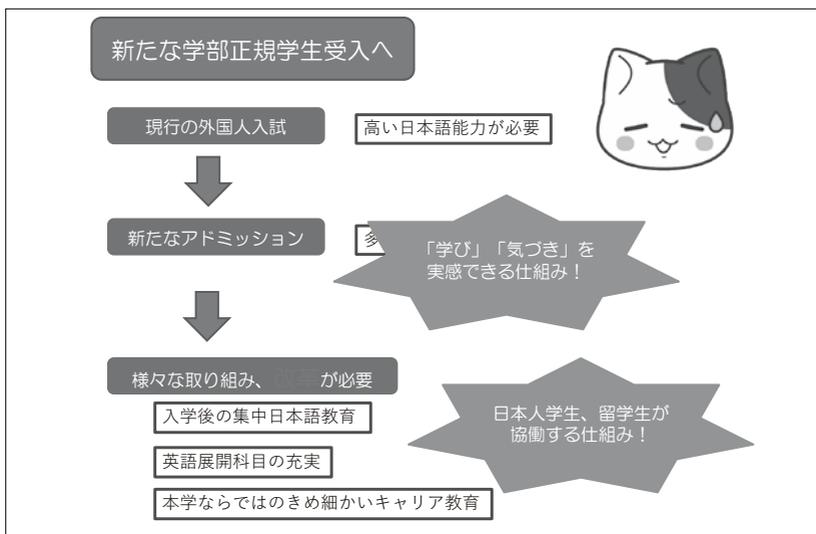
豊かなコミュニケーション力で異なる文化、習慣を持つ人々とともに課題を解決する共感・協働力

地球規模の困難な課題に向き合い、問題の本質を理論的に解明する思考力

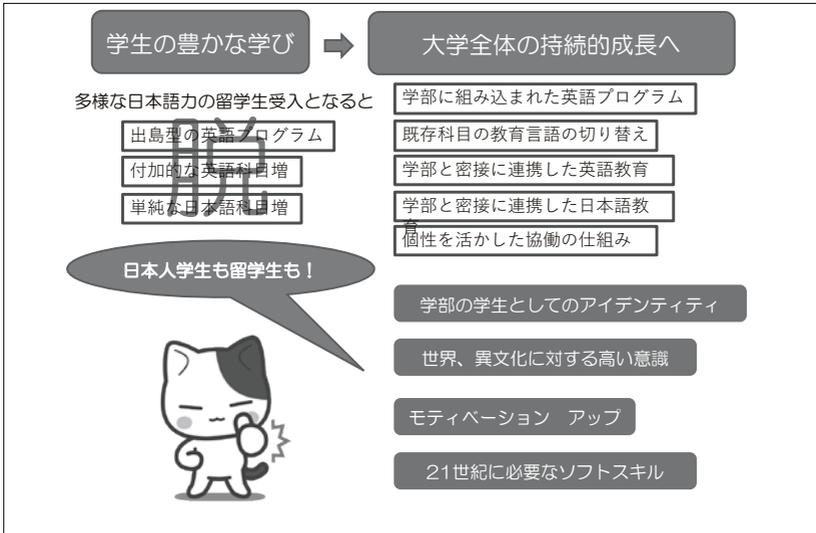
【スライド⑥-3】



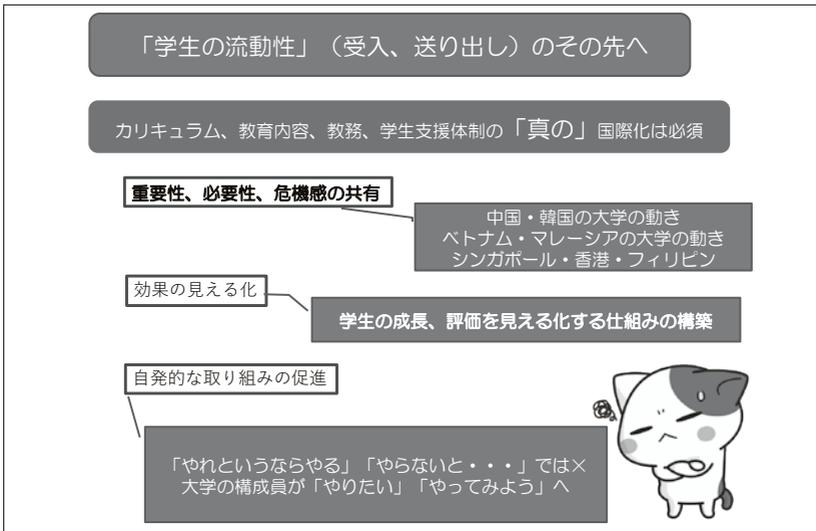
【スライド⑥-4】



【スライド⑥-5】



【スライド⑥-6】



【スライド⑥-7】

ご清聴ありがとうございました

